

— 角田市 角田・藤尾・東根地区について —

尚絢女学院短大

鈴木於安 ○村田陽子 遠藤時子 角掛美智子

目的 現在の農山漁村において在来型の作業着は殆んど消滅し、現地にその姿はない。しかも着用・縫製経験者も高齢化している。このような現状にかんがみ宮城県全域にわたる在来型作業着について調査・記録し比較考察することを目的とした。前報につき今回は角田市内東部、角田・藤尾・東根の三地区について報告する。

方法 現地に着用・縫製経験者をたずね、種類・型態・材料・縫製・着装などについて聞き取り調査を行い、実物については観察・計測し、可能なものは実物を製作した。

結果 角田市は宮城県南部の農村都市である。藩政時代は石川氏二万三千石の所領地であった。阿武隈川が市内を蛇行しながら南北に貫流し東の取野郡と西の丘陵部に分けている。長年月、阿武隈川が上流から運んだ土砂は広い河川敷となり、護岸と殖産を兼ねて桑園が広がって角田・藤尾・東根ともに養蚕が行われ果内有数の繭の生産地である。

作業着は三地区ともに、種類・型態・材料に共通するものが多い。材料はもめん・地織・綿が最も多く用いられ地に紺緋・紺無地・晒・ネル・格子もめんなどであった。男子では三地区とも種類・名称・材料等に殆んど差異がないが、女子では角田に短衣型式の上着上衣を欠いている。この角田地区は水田・畑作とともに屋外作業は桑摘みを除き男子が分担し女子は養蚕と家事にかかりきりであった。藤尾・東根地区においても米作中心の他地区より屋外作業は少なかつたようである。そこで単衣の長襦袢型の「下ゆかた」・「裾つきいぼん」が上着上衣として用いられ経済性、洗濯や縫製の簡易さとともに肩と裾部の布地や色・柄などの取合せを工夫することがそれなりの楽しみではなかつたかと思われる。